

# 移行期における被災地支援ボランティア

## —Blue Bird 2018 宮古ボランティアの活動報告書から—

山本 唯人

### 《要旨》

本論文では、活動終了後に参加学生から提出された「ボランティア活動報告書」の分析をもとに、緊急支援の段階から平時への移行を見据えた「移行期」における被災地支援ボランティアの現状と課題、進むべき方向を展望する。特に学生たちの回答から、イベント開催などを通じて地元住民の交流を支援する「交流支援型」の活動が、今後の被災地支援の軸になりうる可能性を指摘する。

---

キーワード：東日本大震災 ボランティア 活動支援 交流支援

---

## 1 課題と問題関心

東日本大震災から8年余りが経過し、被災地の課題は緊急支援の段階から復興後の平時への移行を見据えた段階に変化してきている。こうした段階の移行は、それ自体、地域社会が再建されていくことであり、必然的な変化ではあるが、「被災地支援」をテーマに活動を続けてきた外部のボランティアには、今後も活動を継続するか否か、継続するとすれば、何を今後の軸にしていくかなどをめぐって、悩ましい問題を投げかける。

東日本大震災では、多くの大学がボランティアを派遣した。5年目を経過したあたりから、撤退を決めたという話が頻繁に聞こえるようになり、いままも継続している大学では、その先をどうするかが、真剣に取り組むべき課題になるだろう。

2011年度から活動をはじめ、2019年度現在もそれを続けている青山学院女子短期大学の「東日本大震災被災地支援ボランティア Blue Bird」は、こうした、大学派遣のボランティアのなかでも、最も長く続いている活動の一つと思われる。

「緊急時」から「平時」への段階移行が、東日本大震災にかぎらず、どの災害でも起きることを考えると、現在の移行期における活動の状況やそこでみえてきた課題をふり返っておくことは、今後のボランティアの企画・実施にも参考になるだろう。

ところで、ボランティア活動を評価する際に重要なのは、ボランティアを受けた側、ボランティアを実際に担った人びとの声であることは言うまでもない。Blue Bird では、残念ながら、ボランティアを受けた側の声を系統的に集めることはできていないが、毎回、

活動終了後、ボランティア参加者全員に「活動報告書」を提出させている。

そこで、本稿では、2018年8月に実施された第15回ボランティア参加学生の「活動報告書」の内容を分析する。そこに現れた学生の受けとめを資料的根拠としながら、移行期における被災地支援ボランティアの実情と課題を展望することを試みる。

では具体的に、第15回の活動で、課題になったことは何か。

大きく分けて2つの課題があったと思われる。

①目に見える復興の課題が終わっていくなかで、Blue Bird 宮古の活動を続けていくか。続けるとすれば、どのようなアプローチでそれを発展させていくか。

②31人という大人数のチームづくりを適切に行うこと。

②については、第15回にかぎって応募者を例年より多く採用した結果生じたことで、段階移行期に固有の課題ではない。しかし、第15回の活動においては、大きな課題になったので、そのことも含めて、学生たちの報告書を分析する。

## 2 第15回被災地支援ボランティアの概要

図1 第15回被災地支援ボランティアのプログラム概要 (2018年)

### 【事前準備】

日程	内容	場所
5~7月	事前学習 グループごとの準備 ミニレクチャーなど	

### 【ボランティア】

8月3日	壁画鑑賞	
	学ぶ防災	
	イベント広報	三王団地
	会場下見	グリーンピア体育館
	バーベキュー準備	グリーンピアふれあい交流館
	バーベキュー	
	シェアリング	
8月4日	グリーンピアまつり準備	グリーンピア体育館
	カレー準備	グリーンピアふれあい交流館
	イベント広報	真崎海岸地引網
	イベント広報	楯ヶ崎、佐原

	グリーンピアまつり キッズコーナー コンサート カレーパーティー	
	全体シェアリング	
8月5日	重茂味まつり	
	宮古湾ボート天国	
	ホームステイ	
8月6日	鯨ヶ崎夏祭り	鯨ヶ崎公民館
	三王団地夏祭り	三王団地集会所
	ホームステイ	
	ねまれや夏祭り	大槌地域共生ホームねまれや
	佐原バザー&カレー	佐原県営住宅内集会所
	崎山貝塚縄文の森ミュージアム	
	シェアリング	
8月8日	浄土ヶ浜観光	
	昼食&買い物	道の駅・シートピアなあと

【青山祭（文化祭）での発表】

日程	内容	場所
9月8日	ボランティア活動報告書を提出	
11月3～4日	青山祭 展示、パネルガイド 食品の販売	

【その他】

日誌を書く（各自が1日・1頁で毎日）

(1) 事前学習

ボランティアのプログラムは事前学習からはじまる。5月からボランティア実施直前の7月まで、2週間に1回程度、昼休みに教室に集まり、グループごとに分かれて、現地活動の準備や、レクチャーなどで知識を身につける。

(2) ボランティアの実施

2018年夏は8月3～8日に実施した。主なボランティア場所は岩手県宮古市である。拠点とする宿泊施設は、宮古市田老地区のグリーンピア三陸みやこである。期間中、大槌町の

地域芝生ホーム・ねまれやにも訪れた。

初日は恒例で田老地区の震災遺構・たろう観光ホテルを訪れる。目に見える被災の跡が少なくなる中で、津波の爪跡を残した建物を見ること、体験者のガイドから直接津波の説明を聞くことは、「震災」「津波」を実感を持って理解する上で、欠かせないプログラムになっている。

ボランティアの主な内容は、住民を招いて各種のイベントを開催すること、および、地域の集会場などを訪れて、住民を対象にバザーや夏祭りを開催することである。

4日のグリーンピア祭りは前者のタイプ、6日の鯨ヶ崎夏祭り、三王団地夏祭り、ねまれや夏祭りなどは後者のタイプである。

これらは、住民間の交流を支援するという意味で、「交流支援型」のボランティアと呼ぶことができる。

それに対して、現地で行われている活動を支援する、従来の支援活動に近いイメージの活動が、重茂味まつりや宮古湾ポート天国をスタッフとしてサポートすることである。

これらは、「交流支援型」に対して、「活動支援型」のボランティアと呼ぶことができる。

重茂味まつりは、地元の漁協が主催する海産物の即売会であるが、その支援は毎年恒例の活動になっている。

ホームステイは、宮古市内の一般家庭に分散して宿泊させてもらうプログラムだが、家庭的な雰囲気のなかで、津波の体験や日常生活の様子を知る貴重な機会になっている。

浄土ヶ浜観光も毎年行っている。ボランティアをしていると、活動場所以外の土地をめぐったり、買い物をする時間がとれないことが多い。しかし、地域社会を知ることは、ボランティアを充実させるうえでも必要なことである。あえて、観光だけの時間をとって、その土地の色々な場所に触れることは、重要なプログラムである。

シェアリングとは、その日の気づき、活動の感想、思いなどを自由に共有するプログラムである。ボランティアの意義は、このふりかえりのなかで、自分のものになり、定着の足がかりをえる。今年は、参加人数が多く、発言時間が十分とれない事態も想定して、事前に「活動日誌」を配布して、毎日の記録を書き留めておくように指導した。

### (3) ふりかえり

学生たちには、9月8日までに「ボランティア活動報告書」を提出してもらった。

11月3～4日に開催された青山祭（文化祭）のなかで、Blue Birdとして一室をとり、パネルによるボランティア活動の紹介、ボランティア参加学生による見学者へのガイドを行った。また、中庭には模擬店を出し、宮古市の特産品を販売した。

パネルをつくる作業、見学者に説明すること、地元の製品のよさをアピールすることなど、ボランティアの経験を受けとめるだけでなく、自分から伝えていく経験をすることが、ボランティア・プログラム全体のまとめにもなる。

### 3 特に心に残っている活動とその理由

これらの経験から、学生たちは何を受け取っただろうか。

ボランティア実施後に、学生から提出された「ボランティア活動報告書」をもとに検討する。

「特に心に残っている活動とその理由」(Q1)、「活動において困難を感じたこと・改善点・要望」(Q2)、「活動から新たに気付いたことや学んだこと」(Q3)、「今回の経験を次につなげるために」(Q4) という4つの質問の回答を、文末の「【資料編】「ボランティア活動報告書」の概要」にまとめた。

以下、この【資料編】にまとめた回答を参照しながら、分析結果を読んでもらいたい。

はじめに、「活動報告書」の第1項目、「特に心に残っている活動とその理由」(Q1)の回答を分析する。その結果をまとめたのが、以下のグラフである。

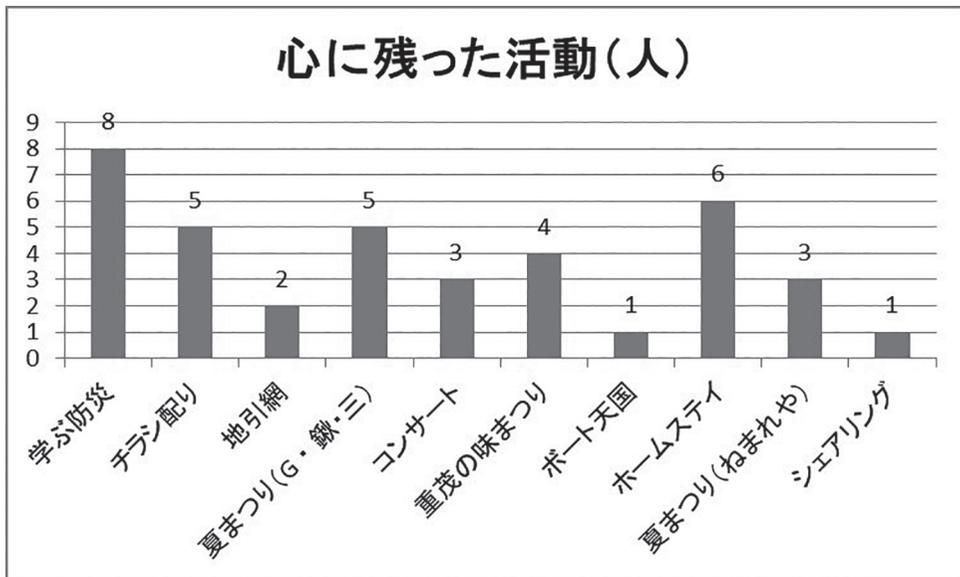


図2：特に心に残っている活動

(注) 作成山本

初日の「学ぶ防災」は、被災の目に見える痕跡が失われる中、「被災」の実態に直接触れる機会として、多くの学生にインパクトを与えている。

今年のメインプログラムである「夏まつり」(8月4日・グリーンピア、6日・鍛ヶ崎・三王団地、7日・ねまれや)はいずれも多くの件数になっている。「夏まつり」は、特定の目的を持った活動を支援する「活動支援型」ではなく、人と人の交流を支援する「交流支援型」のボランティアであり、ともすれば、活動の焦点が分かりにくくなることが懸念された。しかし、結果的には「交流支援型」に軸足を置いた今年のBlue Bird 宮古の活動は学

生たちに強い印象を残すことができた。復興に特化せず、地域の土台になる人と人の「つながり」づくりを目的とする「交流支援型」の活動は、復興以降における東北被災地との関わりを続ける一つの足がかりになると思われる。

例年、多くの学生が充実感を持って参加する「活動支援型」の「重茂の味まつり」は、今年も多くの学生が印象に残る活動に選んだ。

協を固める活動として「チラシ配り」と「ホームステイ」にも注目したい。報告書の声を拾うと、チラシを配っていく中で交わされる心温まる会話、そして、ホームステイのなかで文字通り寝食を共にするなかで語られる津波の体験などは、学生たちに深い影響を与え、いまはかたちに見えない「被災」をリアリティを持って受け止める重要な機会になっている。

「シェアリング」については、この質問で挙げたのは1名だったが、ほかの質問でも、何人もの学生がその大切さを指摘している。現地におけるチーム形成に必要な活動としてその意義が確認されたといつてよい。

#### 4 活動において困難を感じたこと・改善点・要望—課題項目の分析

次に、「活動において困難を感じたこと・改善点・要望」(Q2)の回答を分析する。

学生の記述から、「a 事前準備の不足」「b 大人数のチームの難しさ」「c 主体的に動いていない」「d 被災者との会話の難しさ」「e 自分から話しかけられない」「f 部屋割の問題」「g ホームステイ先の環境不適應」「h 活動現場で出てきた課題」「i その他」という9項目の「困難・改善点・要望」項目(以下、「課題項目」)を抽出した。

「大人数のチームの難しさ」は事前準備段階のアンケートではっきりと課題として表面化していた。現地でどうなるかが大きな不安要素だったが、初日のバーベキューや2日目以降の夏まつりを通じてチームづくりが進み、表面上は解消されたように見えたため、引率教員サイドからはどの程度の影響があったか分かりづらかった。報告書を見ると、多くの学生が立ち上がり時点でのやりにくさを訴えており、やはり、事前準備の段階でもう少ししていねいにチーム作りをした方がよかったことは、反省点になるだろう。

もう一つかなりの学生が挙げている課題項目に「被災者との会話の難しさ」がある。これは、事前学習の際にテーマとしてはとりあげていたが、もう少し具体的に、かつ専門的に踏み込んだ学習をしておけば、現地での会話にスムーズに入れたかもしれない。

「ホームステイ先の環境不適應」の問題は、外部から見えにくいだけに、注意しておく必要のある課題である。

#### 5 活動から新たに気付いたことや学んだこと—「気付き・学び」項目の分析

第三に「活動から新たに気付いたことや学んだこと」(Q3)の回答を分析する。

学生の記述から、「a 防災の教訓」「b ボランティアとは」「c 現地に行くことの大切さ」「d 人の温かさ、やさしさに触れる」「e その他」という5項目の「気付き・学び」項目（以下、「学び項目」）を抽出した。

最終日前日の8月7日夜、河見誠先生の指導により、「ボランティアとは」「その経験をどう生かすか」を問いかけとする、長時間のシェアリングを行った。そうした現地での活動やシェアリングの経験を踏まえて、「そもそもボランティアとは？」をめぐる深い考察が行われたことが、今年の Blue Bird 宮古の特徴の一つだったと言える。

東北の被災地が復興から次のステージを迎え、社会全体としても「ボランティア」とは、「支援」とはを再定義しようとする時期に、まさにリアルタイムで、現場から「ボランティア」の意義を創造する作業は、刺激的な実践教育の機会にもなった。資料編に掲載した学生たちの「生きた言葉」はそのことを指し示している。

## 6 今回の経験を次につなげるために―「次につなげる」項目の分析

最後に、「今回の経験を次につなげるために」（Q4）の回答を分析する。

学生の記述から、「a 防災に生かしたい」「b 今回の経験を伝えたい」「c 自分の生き方に取り入れる」「d また宮古に行きたい」「e その他」という5項目の「次につなげる」項目を抽出した。

現在の宮古から被災の痕跡はほぼ消えているが、「学ぶ防災」や宮古の色々な住民との接触を通して、やはり、「東日本大震災の経験」に触れ、そこから防災の教訓を深く受け取っていることを確認しておきたい。「活動支援型」から「交流支援型」への変化と言っても、やはり、「東日本大震災」をふまえた上での「地域・つながり」づくりであり、震災に対する深い理解は必要である。

「伝える」活動については、青山祭での展示・販売活動が受け皿になっている。

多くの学生が何らかの形で「また宮古に行きたい」、もしくは、かわりを続けたいという意思を表明しており、このニーズをうまく組み上げていけば、継続的な活動の企画につながる可能性はあるだろう。

## 7 結論

夏祭りのなどのイベント開催を中心にした「交流支援型」の活動は、復興から平時へと向かう時期のボランティア活動の軸になりうるか。

学生たちの回答からは、一見、明確な支援ニーズを持たないこれらの活動が、意外なほどの充実感をもたらしており、震災や地域生活に関する深い学びの糸口にもなっていることが浮かび上がった。ただし、表面的には「震災」のあとが消え去ったかのように見える「日常」も、一歩、そこで生きている個人の心の風景にふれれば、その「日常」とは過酷

な震災体験を踏まえた上での「日常」であることが理解される。

その意味で、あらゆる活動の前提として震災・津波を学ぶことは重要であり、それを踏まえた交流支援であることは意識する必要があるだろう。

一方、学生たちが課題として挙げた内容を見ると、31人という参加人数の多さは、チームづくりの上で、かなりの負担感をもたらしていたことが分かる。

シェアリングやふりかえりは、気付きや学びを得る上で、非常に重要な意義を持っていることも実証された。気付き・学びの内容としては、「防災の教訓」や「人の温かさ、やさしさに触れる」など、直接活動内容に触れるもののほかに、「ボランティアとは」という抽象的な問いかけが、深い反省を引き出す上で有効に機能していることも分かる。

現地のニーズに答える具体的な活動を続けながら、「ボランティアとは」という問いに新しい答えを与え続けることは、それ自体、「ボランティア」に関するわたしたちの認識を広げ、社会全体における「ボランティア」の発展に寄与することでもあるだろう。

### 【資料編】「ボランティア活動報告書」の概要

#### Q1 特に心に残っている活動とその理由

<p>【8月3日】 学ぶ防災 (8人)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災の映像とガイドの体験談。津波の放送後に荷物を取りに行った人がいた。地震直後はたいしたことないと思いがちだが、その後の災害が予想を超えていたことを知ることができた。</li> <li>・津波のことを本当に起こった場所で知ることができた。防潮堤に種類があること、いまの防潮堤に色々な意見があることなどメディアで放送されない実際の様子を知ることができた。</li> <li>・その後の5日間に大きく影響を与えた。語り部の実体験と思いを聞いて胸がはちきれてしまうのではないかと思うほど痛々しい感情を覚えた。改めてこの震災の大きさとひどさを痛感した。</li> <li>・実際に体験したガイドさんからのお話に考えさせられた。そのまま残されている防潮堤、4.5mのコンクリートを一瞬で呑み込む津波の恐ろしさ。一人の声かけが何百人の命を救った中学校のエピソード。マスコミ未公開映像を撮影された場所から見て緊迫した状況がリアルに伝わってきた。「震災後は海をみたくなかったが、津波の共存しながら海と向きあっていかなければならない」というフレーズが印象的。ニュースや新聞の情報を正しいと思うことの危険。現地でないと知れない事実を知ることができてよかった。</li> <li>・津波の恐怖を見て、聞いて、感じた。</li> <li>・テレビのアナウンサーはすらすらとニュースを読むが、ガイドさんの声は震えていて、目に涙をためながら話す。津波の被害が想像していたよりも残酷で言葉を失った。「震災は忘れるからやってくる、この震災を忘れてはいけない」と聞き、私も忘れないようにしようと思った。</li> <li>・ガイドから直接話を聞き、たろう観光ホテルを見て津波の恐ろしさを体感した。「津波は忘れるからやってくる」という言葉が印象に残った。防潮堤の建設について漁師から反対の意見があることを知った。宮古に来なければしるこのできないことがたくさんあることに気付いた。</li> <li>・海の恐さ、すさまじさをあらためて思い知った。</li> </ul>
-----------------------------	---

	堤防の有無について住民と国との意見の対立など、表面化されないが人の心の中に存在している意見が垣間見えた。
【8月3-4日】 チラシ配り (5人)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チラシ配りをきっかけに近隣同士の人がはじめてあいさつする、ボランティアをとおして交流の場をつくる。</li> <li>・初対面なのに震災や自分の病気、孫の話などをしてくれた。来てくれて嬉しいと言われて嬉しかった。</li> <li>・明るい笑顔で迎えてくれた、「楽しみにしている」「がんばって」と声をかけてもらえた。Blue Birdのメンバーとも宮古のすばらしさを共有できた。</li> <li>・「来てくれてありがとう」といってもらった。「チラシを持ったから来た」という人がいてやってよかったと思った。</li> <li>・6日間で宮古の方々の温かさに一番触れることができた。わざわざ出てきて話をきいてくれることに驚いた。話を聞く行為そのものがボランティアにつながることを学んだ。Blue Birdと宮古のつながりの強さ。ボランティアは継続しつながりを大切にしなければならない。</li> </ul>
【8月4日】 地引網 (2人)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一緒に地引網をして、初対面にもかかわらず宮古の方の温かさを感じた。教員もおらず何をすればいいか分からなかった。参加しようと声をかけてくれたので輪に入ることができた。終えた後取れた喜びを共有できた。現地の人から話しかけてくれたのが嬉しかった。</li> </ul>
【8月4-6日】 夏まつり (5人) グリーンピア 鎌ヶ崎 三王団地	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他学科・専攻の学生、教職員と話せた。普段の学校で交流する機会のない人々と出会えた。</li> <li>・(体育館でのキッズコーナー) 子どもから年配まで来てくれて笑顔になっていたので幸せな気持ちになった。</li> <li>・多くの方が足を運んでくださり地域の方々の生き生きした姿や楽しそうな姿を見てありがとうという言葉ももらい、やってよかったと思った。</li> <li>・(バザー、お祭り) 笑顔ももらい、「ありがとう」「また来てね」と言葉をかけられたことがうれしかった。</li> <li>・お祭りを開くことでボランティアになるのか不安に思ったが、宮古の人たちを支えることができると身をもって分かり参加してよかったとおもえた。</li> </ul>
【8月4・6日】 コンサート (3人) グリーンピア 鎌ヶ崎 三王団地	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「花は咲く」を一緒に歌ってくれて一体感を感じた。千春さんやフラダンスの人たち全員が協力してくれて盛り上がる事ができた。「楽しかった」「ありがとう」と言われて温かみを感じた。</li> <li>・地元の方とたくさんふれあうことができた。「花は咲く」を一緒に歌い、涙を流して聞いてくれた方もいた。わたしには分からない津波、震災への想いがあると思った。</li> <li>・「花は咲く」を一緒に口ずさんでくれたので一つになった気がした。マウンテンマウスの「この世に生まれてきてくれてありがとう」、自分の存在を支えてくれる身の回りの人に感謝しなくてはという気持ちが芽生えた。</li> </ul>
【8月5日】 重茂の味まつり (4人)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お弁当作り、椅子出し、船に乗った際などに地域の方々とたくさんお話し、重茂の人びとの温かさを実感できた。</li> <li>・お客様を待たせてしまう時があったが「大丈夫」と言ってくれた。東京で接客業のアルバイトをしているが、そんなことを言ってくれるお客様はいないので感動した。宮古の人たちの温かさ、優しさを感じた。津波で被害を及ぼした海をなぜ宮古の人たちは愛しているのか気づくことができた。</li> <li>・漁師の方々から温かい歓迎を受けた。ウニが食べられた。東京ではできない体験。若い漁師さんと接し、漁師の仕事について考え刺激を受けた。船に乗り、漁師さんの苦勞を体感できた。</li> </ul>

<p><b>【8月5日】</b> 宮古湾ポート天国 (1人)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水上バイクなどを体験させてもらい、宮古の人たちのやさしさを感じた。</li> </ul>
<p><b>【8月5-6日】</b> ホームステイ (6人)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災の話し方が想像と異なった、あえて軽く話す、ありのままの感情では話せないのかなと思った。病院の混乱した状況が想像できた。</li> <li>・見ず知らずのわたしたちを快く受け入れてくれる家族に心が温かくなった。被災した人のお世話になる状況、笑顔になってもらうのもボランティアなのだった。</li> <li>・津波の日のことを教えてもらい、他人事だった震災が身近に感じられた。</li> <li>・初めて会ったわたしたちを家族のように温かく迎え入れてくれたことが嬉しかった。</li> <li>・震災当時、津波で流された遺体や生き残った家族が遺体を探す話。昨年度学ぶ防災で聞いた話は震災のほんの一部なのだと気づかされた。</li> <li>・学ぶ防災のガイドとは違った視点で震災発生時の話を聞いた。何気ない思い出も津波で欠けてしまった、不思議な感覚が忘れられない。自分の地元で被災経験を持つ知人がいるが、真剣に話し合う機会がなかったことに気付いた。</li> </ul>
<p><b>【8月7日】</b> 夏まつり (3人) ねまれや</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほかの夏祭りとは違い子どもがいつも過ごしているなかでの夏まつりだったので盛り上がった。最初は恥ずかしがっていた子が、最後は自分から声をかけてくれたので嬉しかった。</li> <li>・積極的に地元の子ともたちと接することができた。子どもたちから自分のところに来てくれたのが嬉しかった。</li> <li>・子どもたちが喜んでくれて遊ぼうと来てくれた、本気で楽しんでくれたのが分かった。</li> </ul>
<p><b>【8月7日】</b> シェアリング (1人)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他人の意見や体験を聞くことで自分の経験も増えた気がした。自分自身と向き合えた大切な時間。その日の活動を何となくで終わらせず、少しでもふり返って見つめ直して考えることで、必ず気付くことがあった。</li> </ul>

Q2活動において困難を感じたこと・改善点・要望

<p>a 事前準備の不足</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・かき氷を作るとき想定しなかった問題が次々に出てきたことが反省点。やる前に細かくイメージすべきだった。</li> <li>・全員が自分のやることや注意事項を前日に確認したにもかかわらず忘れてしまう。</li> <li>・初日は自分が何をもってきて何をするのか把握できていなかった。時間にもルーズになってしまった。</li> <li>・細かい日程、変更事項、自分の仕事などの把握が甘い点があった。</li> <li>・ドタバタな準備で、祭り当日の流れがよく分からないまま当日を踏まえてしまった。</li> <li>・宮古で過ごしたすべてのプログラムに当てはまることだと思う。</li> <li>・先生との連携ももう少し取れたらと思っている。</li> <li>・変更点がいっぱいあって、1日の流れが前日までではっきりわからないままだったこともあった。1日の流れが分かるようなプリントがあれば混乱する事がなかったと思う。</li> <li>・活動の流れをしっかりと把握してなかったため、次に自分が何をすべきかを考えて行動すべきと感じた。</li> </ul>
------------------	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の担当以外の仕事を十分把握できていなかった。いざというとき臨機応変な対応ができなかった。</li> </ul>
<p>b 大人数のチームの難しさ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例年より大人数で時間にルーズな人が多く時間が押してしまうことが多かった。</li> <li>・大人数で行動することの大変さを感じた。</li> <li>・例年により人数が多いので大変だったと思うが、あらかじめどこでどのような動きをするか分かっていれば前日の確認だけで済み、当日注意することも少なくなると思う。</li> <li>・行くまでは Blue Bird の人たちどうし1週間近くすごせるか不安だった。先生がレクリエーションの工夫をしてくださり、友達ができて、充実したボランティア活動をすることができた。</li> <li>・例年よりも人数が多くお昼の話し合いの時からまとまらず不安に感じていた。</li> <li>・ホテル、ホームステイの部屋割、新幹線の座席も自由でないと聞いて不安を感じた。</li> <li>・結果的にほぼ全員の名前を覚え、中を深めることができた。色々な人とベアを組んだのは良かった。</li> <li>・準備期間が短かった。30人のメンバーときちんと話したのがボランティアの初日だったので不安が大きかった。早い段階で自己紹介時間があれば、チームとしてスタートできた。</li> <li>・たくさんの人数でたくさんのことをするのは大変だと思った。</li> <li>・特に歌は一回も合わせたことがない中で歌うのは難しかった。</li> <li>・バザーは事前準備が大変、事前準備に参加できる人も少数で人手不足になり、一部の人が余分に負担することになった。</li> <li>・コミュニケーション不足のため、お互いを知らない人が多く、事前準備がうまく進まなかった。</li> <li>・毎週火曜日の昼休みだけでは足りないと感じた。</li> <li>・事前準備の際も全員が黒板に向かって坐るのではなく、輪になって坐りコミュニケーションをとることが重要だと思った。</li> <li>・現地では仲が急激に深まったので結果的には良かったが、事前に出来ることがあったと思う。</li> <li>・人数が多くてあまり打ち解けることができなかった、準備の回数をもう少し増やせればと思った。</li> <li>・Blue Bird のメンバーが団結できるかが一番の困難だった。</li> <li>・事前準備で積極的に取り組む人が決まっていて、メンバー同士の不満がたまっていた。</li> <li>・人数が多く連携がいきわたっていないことが多々あった。</li> <li>・誰かがやってくれるという意識や指示待ち状態の場面があった。</li> <li>・人数が多いので、全員の気持ちがまとまるか、しっかり活動できるかが不安だった。</li> <li>・シェアリングで一人ひとりの気持ちを聞き、みんなと向き合うことができた。</li> <li>・人数が多いので、一人ひとりが時間配分を考えて行動すべき。</li> <li>・活動日までのコミュニケーション不足。意見がいろいろ状況にあった。</li> <li>・現地では同じ人とばかり行動しているところには話しかけづらさを感じるがあった。</li> </ul>
<p>c 主体的に動いていない</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自主的、積極的に行動することが難しかった。</li> <li>・自主性をそれぞれがあまり意識しながら行動できなかったように感じた。</li> <li>・事前準備機関から他人任せの雰囲気があって、なかなか決まらない事項が</li> </ul>

	<p>あった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・回りを見て判断して行動することができていかなかった。</li> <li>・自分がやるべきことを考えながら行動し、その日にやらなければいけないノルマを達成する事が難しかった。</li> <li>・いまいち積極的に活動できなかった。</li> <li>・主体的に動くことができていたか疑問。様々な人にお膳立てをしてもらっていたと感じる。</li> <li>・公共の場で騒ぐといった配慮にかける行動が見られた。</li> </ul>
d 被災者との会話の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災の話をされる時、相手を傷つけないかなど色々考えてしまい、質問が難しかった。</li> <li>・震災について、どういう言葉を使えばよいか選ぶのが大変だった。</li> <li>・今回のボランティアは地域の方と交流し、気持ちによりそうこと。実際にやってみて、当時の話を思い出したくない人もいて、自分から話をふれず、聞くことしかできなかった。</li> <li>・現地の人から話を聞く中で大変さをすべて理解するのは困難、現地も当時の想像できるような感じではなく、映像を見るまでどんな感じかも分からなかった。</li> <li>・遠慮せずに宮古の方と話そうと思う。</li> <li>・震災当時の状況を聞きたくてもどこまで踏み込んでいいのかの境界線が分からず、手探り状態だった。人によってバックグラウンドが異なるため、難しかった。</li> <li>・最初は緊張して、宮古の人たちとコミュニケーションを取るのが難しかった。少しずつ慣れてきて自分から話しかけられるようになった。</li> </ul>
e 自分から話しかけられない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・菅野先生のメッセージを聞いて、自分から話しかけることができていなかったと思った。</li> <li>・自分から話しかけることができなかった。</li> <li>・バザーの時、商品を通してお話することはできても、自主的にお話をする行為になかなか踏み込めず、難しいと感じた。</li> <li>・津波を実際に体験した一人ひとりから話を聞くことが十分できなかった。</li> <li>・自分からお年寄りの方に話しかけることができなかった。</li> <li>・話すことが苦手なため、現地の人と話したくても、自分から話しかけることができなかった。</li> </ul>
f 部屋割の問題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・期間中は疲れがたまっていたので早く寝たいと思っていたが、最終日は早く寝たい人と夜まで話した人の部屋が分かれたので十分睡眠できた。</li> <li>・グリーンピアでの部屋割、寝たい人とそうでない人が混在している状況が分かった。</li> </ul>
g ホームステイ先の環境不応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームステイ先でハウスダストや埃で鼻水、くしゃみがひどかった。犬を飼っている家もあった。事前の集まりでアレルギーについて話した方がよい。</li> </ul>
h 活動現場で出てきた課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チラシ配りで最初から行けないと言われることもあった。すべての人にとって交流の場になる訳ではない。</li> <li>・カレー作りでは何をすればよいか分からなくなってしまい時間を持て余した。</li> <li>・バザーの品物を仕分けする時、それだけに気を取られて、ごみを放置したり、割れ物をテーブルに置きっぱなしにすることがあった。回りをよく見る必要がある。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カレー担当になると地域の人と交流できない。違う人が交代で担当する方が平等に地域の人と交流できる。</li> <li>・キッズコーナーでは小さい子供たちにルールを説明するのが難しいと感じた。時間や余裕があれば小さい子の目線になって分かってあげることができたと思う。</li> <li>・地域の方々とはコミュニケーションをとれたが、一緒にボランティアに参加した人たちとはあまりお話しできなかった。期間中、担当するグループを変えても良いのかと思った。</li> <li>・バザーでは管理や整理、商品の並べ方の工夫など学ぶことや考えることがあった。</li> <li>・ねまれやで射的担当だったため、それ以外の仕事で子どもたちと関わらず、もっと色々話したかった。</li> <li>・ねまれやは最後の射的だったので、景品が足りず、子どもたちももめて泣き出す子が出てしまった。景品の配り方を工夫すべき。</li> <li>・バザーでお客様が買ったものを再度売ってしまった。</li> <li>・衣類について、余ってしまったので集め方を工夫すべき。女性物のみ、子供物のみなど、絞り込む一つの方法では。</li> <li>・遊びのルールをもっと簡単にした方が良い。ルールを守れない子供が出てきて、手が回らなくなった場面もあった。</li> <li>・カレーについて、役割分担をしっかりすべき。</li> <li>・休憩時間を順番にしっかりとれると良い。立ちっぱなしで疲れるのと、会場を見渡したり客観的に考える余裕になる。</li> <li>・カレー担当は現地の方とお話しできる機会が少ない。</li> </ul>
i その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほぼ毎日、バザーやお楽しみ会だったので、一日くらい観光する日があってもいいと思った。</li> <li>・お昼ご飯を食べる時間が少なかった。</li> <li>・予想外の寒さ、上着を持ってくるように伝えてほしかった。</li> <li>・シェアリング、地べたに座って、何時間も話を聞くのは辛かった。大切さや行く意味は分かるので、半分の人数で発表というカタチでもよかったと思う。その方が集中でき、シェアリングの価値も高めることができたのではないか。</li> <li>・ホームステイは密にお話しできるので、ぜひ続けてほしい。</li> </ul>

Q3活動から新たに気付いたことや学んだこと

a 災害の教訓	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学ぶ防災のガイド、「海を嫌いになりたくない」という話が印象に残った。海と一緒に生きているのだと感じた。</li> <li>・ポート天国、身近に海がある環境で、海と一緒に生きているのだと感じた。</li> <li>・学ぶ防災、現地の方の言葉に触れて、震災の悲惨さ、津波の恐ろしさを知ることができた。テレビで見るとは全く違った貴重な経験。防潮堤のメリット、デメリットを知り、どう解決できるのだろうかと考えた。</li> <li>・学ぶ防災、実際に被害に遭った方のお話はとても重みがあった。</li> <li>・「自分の命は自分で守る」という言葉が印象に残った。津波の時のDVDを見て家やお金や自分以外のことに気が行ってしまい、自分の体、自分の命を優先に考えられなくなっているひとを見た。</li> <li>・防潮堤は津波から町を守るなどの役割を果たすと同時に、それがあつて津波の様子を自分の目で確認しにくくなる、漁師さんが海と物理的に離</li> </ul>
---------	---

	<p>れてしまう、海が見えなくなるなどの問題も発生する。これを作ればだいじょうぶというものなどないと感じた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現地の方は震災から目を背けず、すすんで色んなことをしていることに気付いた。震災の事を話してくれたり、同じ目にあうひとが少なくなるように活動するなど。</li> <li>・現地の人から自分の身は自分で守ることの大切さをまなんだ。</li> <li>・震災の話を通じて聞いたり、実際の被災地を見ることが、テレビとは違う震災の恐ろしさを実感できた。</li> <li>・学ぶ防災、災害はいつどこで起きるか分からないので、誰もが自分に関係ないと思っはいけないと学んだ。</li> <li>・実際に防潮堤の上に立ち、たろう観光ホテルで津波の高さを体験し、津波の恐ろしさを感じた。また現地の人びとの津波への気持ちを汲み取ることができた。</li> <li>・ガイドのかたの「災害が忘れたから起こる」という言葉が印象に残っている。</li> <li>・自分たちが身にしみて感じたことを伝えなければいけないと思った。</li> <li>・学ぶ防災、様々な生々しいお話を直接聞いて、貴重な経験になった。知っているつもりだったことでも、知らなかったことが多くあったと気づいた。</li> <li>・海との付き合い方、私たちがすべき備え、復興の理想と現実など多くのことを新たに知った。</li> <li>・復興について、直接行動することはできないが、復興を手助けすることはできる。地元のものを買う、食べる、地元の人びとと交流する、知ることなど。</li> <li>・風化しつつある被災地をあらためて考え直すことも、復興の助けになるのではないか。</li> </ul>
<p>b ボランティアとは</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ボランティア」というより、多くの方と出会い、ふれあい、学ばせてもらう立場であると感じた。</li> <li>・小学生の時からボランティア活動をしてきた。ボランティアの対象となる人から感謝の言葉をいただいたのは初めてだった。感謝されるためにボランティア活動をしているわけではないが、実際に喜んでくれる人の姿を見て意欲がかきたてられた。</li> <li>・日数の長さ、5泊したのははじめてだった。</li> <li>・ボランティア=重労働という考えがあったので、宮古に行くまでこの活動はボランティアではないと思っていた。活動をやるにつれ、人を元気づける、楽しませるのもボランティアなのだとおもえた。</li> <li>・肉体労働だけがボランティアではない。自分が楽しむことで回りの人も楽しむことができる、幸せの連鎖。</li> <li>・ボランティアは肉体労働だけでなく、現地の方の話を聞いたり、現地の方を元気づけたり、笑顔になってもらうことが大切だと感じた。</li> <li>・人のつながりを強く感じた。みんなの元気な姿を見たいし、いろんな話がしたい。こういう出会いがボランティアが続いていく理由だと感じた。</li> <li>・ボランティアする側とされる側という接し方ではなく、背景を知って寄り添いつつ、対等に接することも必要ではと感じた。</li> <li>・積極的に活動することの大切さ。</li> <li>・がれきの撤去や物資の配給などがボランティアだと思っていたので、今回の活動に対して当初はあまり積極的になれていなかった。</li> <li>・バザーやポスティングで実際に話を聞くことで、傷を負った人の心をいやすことができ、それがボランティアにつながると分かった。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もっと自発的に人の話を聞き、伝えていくことが私たちにできることだと感じた。</li> <li>・ボランティアと言うと真面目でかたいイメージだが、今回のようなボランティアもいいと思った。</li> <li>・肉体労働だけがボランティアではないことを学んだ。ホームステイ先で、「こうやってお話をすることがうれしい」と言われ、震災の話を聞くことも人の支えになっていると感じた。</li> <li>・お楽しみやバザーで地域の方々とふれあい、楽しむこともボランティアではないかと思った。</li> <li>・バザー担当、アルバイト経験がなかったので、良い社会勉強になった。</li> <li>・ボランティアは単なる労力を与える活動ではない、被災者は単なる労力を必要としているわけではないと考えた。</li> <li>・国などの大きな機関は資金調達し労力を送ることができるが、わたしたちはそれとは違った方法で支援することが重要だと思った。</li> <li>・最初はお楽しみコーナーで喜んでもらえるか不安があった。「こういうのを聞いてくれてうれしい」というおばあちゃんの言葉を聞き、ボランティアのやりがいを感じた。力仕事でなくても、人が集まる場をつくることはいいことだと気づけた。</li> <li>・ボランティアは何かの目的のためにすることだと思っていた。活動の中で、感謝される場面がたくさんあり、ボランティアは人と人のつながりがあってこそものだったと思った。</li> <li>・自分が漠然と思ってきたボランティアは労働的なものだった。宮古の町は想像以上に復興し、出来ることが残っているか不安があった。</li> <li>・しかし、宮古の方々の心には震災の出来事が残っていて、祭りなどのなかで笑顔や感謝の言葉を受けとった。</li> <li>・ボランティアとは心でもよりそうことだと感じた。</li> <li>・ボランティアとは、「人との繋がり」と自分なりの答えを見つけることができた。</li> <li>・復興作業もほとんど終わった宮古でボランティアを続ける意味、継続することの大切さを学んだ。</li> <li>・肉体労働だけがボランティアではない、宮古の人たちと関わることやふれあう場所を作ること、お話しすることもボランティアの一つであることを学んだ。</li> <li>・声をかけてくれる方が多くて嬉しかった。</li> <li>・ボランティアは役に立ちたいという思いがあればできること、作業的なことだけでなく、話をしたり、遊んだりして元気になってもらえる活動もボランティアになることを学んだ。</li> <li>・自分の知らなかったボランティアのカタチがあったこと、継続することの大切さを学んだ。</li> <li>・震災という負のイメージの出来事をプラスのエネルギーに変えている方がたくさんいることが分かった。NPOやフラダンスなど様々な活動がある。わたしたちはその「プラスのエネルギー」をつくるお手伝いができればいい。</li> </ul>
<p>c 現地に行くことの大切さ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元の方と交流し、実体験など生の声を聴くことの大切さを実感した。</li> <li>・報道されていないことがたくさんある。経験を直接聞くと間接的に聞くのは全く違うものである。</li> <li>・実際に行ってみてまた行きたいと感じた。</li> <li>・震災から7年たつが、体験した地元の方々にとって、復興の一言ではすまないほど心の傷は大きいと思った。メディアと地元のずれを感じた。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メディアを真実と思いきまず、自分なりに取捨選択して正しい情報を見極めていかなければいけないことも実感した。</li> <li>・震災の記憶が薄れて行っている今だからこそ、現地の方々と直接触れ合うことが大切だと思う。</li> </ul>
d 人の温かさ、やさしさに触れる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつの大切さを感じた。「ありがとう」という言葉。宮古の人の心の込め方、言葉の重さに気付き、人の温かさを感じた。</li> <li>・子どもが得意ではなかったので受け入れられるか不安だったが、思ったほど難しくなかった。自分にかけていた人間的な温かさややさしさを子どもたちから感じた。</li> <li>・ポスティングのとき、隣の事情を知っているのに驚いた。ご近所づきあいとはこういうことかと考えさせられた。</li> <li>・地元の方が津波の話をしてくれたのは、忘れてはいけないことだからだと思った。</li> <li>・自分から話しかけることはあまり得意ではなかったが、鉾ヶ崎と三王のバザーで地元の方が声をかけてくれて、人の温かさを感じ、そのあと、自分から話しかけられるようになった。</li> <li>・自分から話しかけた方が相手は嬉しく、会話も弾むことに気付いた。活動を通して、コミュニケーションの楽しさを学んだ。</li> <li>・人の温かさを感じ、人との出会いを大切にしようと学んだ。</li> <li>・大きな被害にあったにもかかわらず、わたしたちをもてなし、津波の体験を話してくれる心の強さとやさしさに感動した。</li> </ul>
e その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シェアリング、他人の意見を聞くことで色々考えさせられ、経験を共有することの大切さを学んだ。</li> <li>・マウンテンマースさんが言っていたように、自分が楽しめないと回りが楽しめない、自分が壁を作っている相手と打ち解けることもできないと感じた。</li> <li>・地元の方の雰囲気や態度から Blue Bird が宮古の一部になっている気がした。</li> <li>・震災前のような宮古の町のにぎわいを取り戻すには想像以上に長い年月がかかると感じた。</li> <li>・更地がほとんどだとおもっていたので意外だった。</li> <li>・バザーの経験から自分は人と接すること、商品を売ることが好きなんだと発見した。アルバイト探しや就職に生かされるのではないかと思う。</li> <li>・中1の女の子の東京へのあこがれの気持ちを聞き、東京の学校に通わせてくれている親に感謝したいと思った。</li> </ul>

Q4今回の経験を次につなげるために

a 防災に生かしたい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災の恐ろしさや地元の方々の生の声を伝えていく必要がある。</li> <li>・災害にならないようにまずわたしたちが忘れないことが大切だと思った。</li> <li>・現地で聞いたことを自分の胸に受けとめて自分の知識、意識として生かす。災害はいつやってくるかわからないという意識を持ちたい。</li> <li>・学ぶ防災、報道されない事実を教えてもらった。「臆病であるべきだった」という言葉が忘れられない。</li> <li>・自分が被災したとき、とるべき行動は何かを考えていきたい。</li> <li>・震災に備えて自分の住む地域の防災にも目を向けて、いまできる防災対策</li> </ul>
------------	---

	<p>をしていこうと思う。</p>
<p>b 今回の経験を伝えたい</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感じたこと、学んだことを青祭でたくさんの人に伝えたい。</li> <li>・7年たった今でも心に深い傷を持つ方々が語ってくれる姿を見て、宮古で体験したことを多くのひとに発信していかなければならないと思った。</li> <li>・貴重な話を教えていただいたので、青山祭で多くのひとに知ってもらいたい。</li> <li>・まずは青山祭で経験したことを工夫しながら伝えたい。</li> <li>・周りと関わるのを避けてしまっているの、色々な人と関わっていきたく思った。人と関わることで発見や情報を得ることができ、つながりがつなかりを呼ぶと思った。</li> <li>・震災は報道されなくなってきている、宮古はこういう場所だったと誰かに伝えていくべき。</li> <li>・今回感じたこと、目にしたものを、忘れない内に家族や親せき、友達に話す、また青祭でも伝えられたらと思う。</li> <li>・どこにいても「青短の学生さんね」という言葉をいただいた、先輩が培ってきた宮古とのつながりを実感する毎日だった。</li> <li>・青短はなくなってしまうが、それまでの限られた時間で、青短生（できれば青学生も）宮古にかかわりを持ってもらいたい。</li> <li>・そのために青祭、SNSなどで今回の経験を発信したい。</li> <li>・今回の活動を友だちや色々な人に共有したい。青祭でもたくさんの人に知ってもらいたい。</li> <li>・宮古で感じて考えて学んだことを家族や友人、知人などに知ってもらいたい。冊子やパネルにして知ってもらう事も一つの手段。</li> <li>・宮古での活動、感じたことを知ってもらいたい。</li> <li>・今回の経験を忘れないことが一番大切。</li> <li>・1人1人が胸に刻んで周囲に伝える。</li> <li>・学んだこと、防災の重要性を周りの人に伝えたい。その機会として文化祭は最適。</li> <li>・学ぶ防災、ガイドさんから聞いた震災の恐ろしさを伝えていくこと。青祭でパネルを読んでもらうこと、説明するなどして伝える。</li> <li>・今回の活動を周りに伝え、震災を風化させないことが大切。</li> <li>・被災地の今の様子や感じたことを伝えたい。</li> <li>・東北の情報を取り入れ、もっと知識を得たい。</li> <li>・青祭でしっかり伝えたい。</li> <li>・青山祭にむけて知ってもらう活動を続けたい。</li> <li>・貴重な体験をどう伝えるかが課題になる。</li> <li>・青祭のための準備から始める。</li> </ul>
<p>c 自分の生き方に取り入れる</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わたしにとってボランティアは「やりたいこと」ではなく、「やるべきこと」。</li> <li>・これからも絶えず様々なことに挑戦していきたい。</li> <li>・日常生活から人の役に立つこと、笑顔にしたり、元気づけたりすることはできる。小さなことでも自分から積極的に行動したい。</li> <li>・人と関り、話をする事の大切さ、学べることがあると知ったので、積極的に話し、様々な年代の人と関わりたい。</li> <li>・次からは自分から積極的に動けるようにしたい。</li> <li>・たくさんの人と交流できるようにしたい。</li> <li>・ボランティア活動でなくても、普段の生活から人々を笑顔にしたり、元氣</li> </ul>

	<p>にすることを意識したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・震災について身近な人に伝えられるようにしたい。</li> <li>・ボランティアとは何か、続けるにはどうしたらよいかを考えた。</li> <li>・ボランティアとは被災地の方を豊かにすること。物資だけでなく、心を豊かにすることもボランティアである。</li> <li>・続けるためには自分から知ろうという志が必要。</li> <li>・これからもボランティア活動を続けてお互いに助け合っていけるようになったらいい。</li> <li>・地震はいつどこで起こるか分からないので、学んだことを伝えて、災害に備えたいと思った。</li> <li>・「自分の身は自分で守る」ことをいざというときは全力で行いたい。</li> <li>・自ら動くという自主性、積極性、相手を思う行動、発言に気を付ける、その場の気遣い、臨機応変な対応など、自分自身の向上につながる。</li> <li>・普段はあまり関わらない高齢者や小さな子供たちとのコミュニケーションは、社会に出たとき幅広い年齢層とつきあう力につながる。</li> <li>・神戸の親戚に阪神淡路大震災の経験について聞きたいと思った。そうした経験が自分の考えを広げてくれたらよいと思った。</li> <li>・思い切って行動すれば素敵な出会いがあるし、成長にもつながる。こうした機会があったら積極的に取り組みたい。</li> <li>・ボランティアに参加したことでやってみないとわからないことがあると気づいた。迷ったらとりあえず挑戦したいと思った。</li> <li>・未知の挑戦で事前準備も当日も戸惑うことがたくさんあった。活動を終えて、参加してよかったと胸を張って言える。</li> <li>・31人という大人数、知り合いもほとんどいないなかでの挑戦は大きな力になった。</li> <li>・恐れずに挑戦すること、それを今後に生かし続けたい。</li> <li>・震災がなければ出会えなかったひとがたくさんいる。一期一会を大切にする。</li> <li>・今回宮古に行き、どのように人と接すればよいのか少しわかったので、実行したい。</li> <li>・今回の活動から得たことを活かすために、ちょっと立ち止まって考えることが大切だと思った。やりたいとおもったことが、厚意から迷惑に変わってしまうのを避けるために。</li> <li>・ボランティアは継続に意味があると学んだので、何事も長く続けられるようにして次へつなげたい。</li> </ul>
<p>d また宮古に行きたい</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何度も行くことで宮古のことが分かったり、地元の人たちと距離が近くなったり、お話を聞くことができると思った。</li> <li>・相手を被災者だと思いつぎないことも大切なのではないかと女の子と話していて感じた。今後も足を運んで、元気を分け合いたい。</li> <li>・もう一度宮古に行きたい、今回学んだことを忘れず、足りなかったところを整理し身につけて次につなげたい。</li> <li>・現地に行くことで学べるがたくさんあったので、今後こういう機会があったら参加したい。</li> <li>・宮古とのつながりを大切にすることが重要。</li> <li>・宮古だけでなくほかのまちも調べてボランティアにいきたい。</li> <li>・今回の経験は一度きりで終わってはならないという意見に共感する。</li> <li>・何回も宮古市に行き、世話になった方にあいさつし、お手伝いすることを続けたい。</li> </ul>

<p>e その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回をきっかけに、宮古や震災に関心を持ち続けたい。</li> <li>・ボランティアは自分の意志で誰かを元気づけたいと思う気持ちからはじまり、直接的でなくても心の支えになれたり、笑顔になってもらえたりするのもボランティアだと思った。</li> <li>・ボランティアのイメージがガラッと変わった。</li> <li>・ボランティアにかぎらず、訪れた場所をよく知ること、地元の方との交流を大切にしたい。</li> <li>・来年のBlue Birdがあるとしたら、毎週火曜日のお昼だけでなく、事前準備の時間を増やして、事前からメンバー同士が仲良くなれたらいい。</li> <li>・青山学院と宮古の人たちの深いつながりを感じたので、この活動を続けて関係を築いていくべきだと思った。</li> </ul>
--------------	--

### Q5その他感想

<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際にいくことで分かることや感じることが多い。</li> <li>・活動に参加する前は必要とされているか分からなかったが、地元の方に毎年楽しみにしているなどと声をかけられ、先輩の存在を感じ、来てよかったと思った。</li> <li>・できれば今後も活動を続けたい。</li> <li>・参加できてよかった。</li> <li>・カレー作りを担当、「おいしかったよ」といわれるたびに嬉しさがこみあげてきた。</li> <li>・また宮古に行きたい。</li> <li>・友達が一人もいない状態から参加したので不安だったが、6日間で全員と仲良くなれて嬉しかった。</li> <li>・シェアリングで違う考えをたくさん聞くことができて、貴重な時間だった。</li> <li>・来年もぜひ参加したい。</li> <li>・多くのひとにまた来てくれてありがとうと言われた。皆に求められている青短を知ることができた。</li> <li>・来年も行きたいと思った。</li> <li>・これからも積極的なボランティアなどに参加しようと思う。</li> <li>・人よりそったり、お話を聞くこと、人とかかわりをもつことなど、ボランティアには様々な要素があると感じた。</li> <li>・双方の関りが大切だと思った。</li> <li>・ボランティアとは肉体的な支援だけかと思っていたが、バザーやお祭りで被災者の心をいやす心理的ボランティアもあると、ボランティアの概念が変わった。</li> <li>・ほとんど毎日異なる人へのボランティアは、コミュニケーションを取れていながらも浅いものだったと感じる。もっと深くまで行きたいと思った。</li> <li>・ボランティアする側と被災者のコミュニケーションは初めてだったので緊張した。</li> <li>・もともと人に声をかけることができず苦勞していたが、ボランティア後、小さい子やお年寄りに楽しみながら話しかけることができるようになった。</li> <li>・今回はできあがったものに乗っかることしかできなかったが、自分で考えて行動し創り出していけるように成長したいと思った。</li> <li>・ボランティアはがれき撤去や炊き出しだけでなく、被災者の心の癒しとして参加する意味があることが分かった。</li> <li>・わたしたちが来るのを楽しみにしている人がいたので、来年も機会があれば参加したい。</li> <li>・最初は人数も多く不安だったが、ボランティアをとおしてよい仲間と出会えた。</li> <li>・自分にとって人のために動くことは初めてだったので、何もかもが新鮮で、知らない町や関わったことのない人と触れ合うことの良さを学んだ。</li> <li>・将来、たくさんの地域が被災地になる可能性がある、自分たちの街が被災した時手を貸してくれるきっかけにもなる、支え合う相互の関係はこれから必要だと実感した。</li> </ul>
--

- ・広い視野を持つことが必要。
- ・取り組む前から自分の限界を決めつけない。苦手意識のあったことでもマイナスイメージから入るのではなく、チャレンジすることの楽しさを知り、考えた方が変わった。
- ・他人と比べすぎず、自分にできる精一杯を尽くすことができれば完璧でなくてもいいと思えた。
- ・1人で頑張ろうと意気込んでしまうのではなく、回りに頼ることも必要だと思った。
- ・ボランティアに行く前と後で自分を変えることができたし、成長できたと思った。
- ・普段は得意ではないが、今回は自分の事だけに集中せず、回りを見て行動できた。やろうとすればできると思い、自分に自信が付いた。
- ・ボランティアとは何か、深く考えるきっかけになった。
- ・果たして本当にボランティアだったのかと活動後から疑問に思っている。ボランティアは「人々の事を思って活動した結果」だと思う。そう考えると今回の活動はボランティアと言えたのか疑問。
- ・今回の活動はボランティアではなく、そのきっかけだったのではないか。

## **Disaster-assistance Volunteer in Transition: From Analysis on the Activity Reports of the Volunteer Program, “Blue Bird 2018” in Miyako**

Tadahito YAMAMOTO

The mission of the disaster-assistance volunteer will change from support for urgent needs to rebuilding infrastructure of everyday life. This paper examines the present situation, problems and future direction of the disaster-assistance volunteer in such a transitional stage on the basis of the analysis of activity reports by the students who participated in this year’s volunteer program. In particular, the paper indicates that “communication-support” type activities to facilitate mutual communication among residents in disaster-stricken area is possibly the main program for a post-reconstruction stage volunteer.

---

Keywords: The Great East Japan Earthquake, volunteer, support for activity, support for communication

---